

宗族再興の象徴的儀礼

現在の閩南農村における「晋主」儀礼を中心にして

潘 宏立

はじめに

閩南の晋江市、石獅市、南安市一帯の農村に行くと、村落の各家屋の屋根に掛けてある赤旗が風にはためく奇妙な風景が、必ずといってよいほど目につく。それは村落内の「晋主」儀礼の標識である。「晋主」の風景は、近年、宗族組織が再興してきた中でよく見られるようになった。

閩南は中国福建省南部を指す地理的概念であり、現在の行政区域では、厦門市、泉州市と漳州市およびそれらの市のもとにある市、県を含む。閩南人は、中国東南部におけ

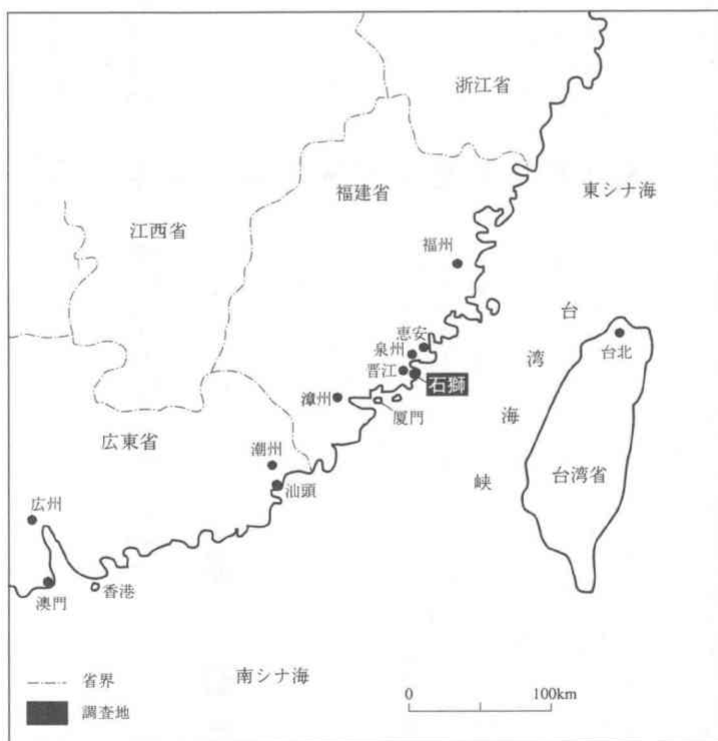
●●●●●

る漢民族の重要なグループの一つである。閩南は、福建系華僑・華人と台湾の閩南系漢民族の先祖の地でもあり、従来、伝統的な社会組織が発達していた。一九八〇年代から、同地域では、経済発展が著しく、とくに一九九〇年代前後から、海外華人、香港、台湾との経済的文化的交流が急速に増加し、社会変化とともに、伝統文化が新しく再生されてきた。そのなかでも、宗族組織は急速にあらゆる側面において再興しつつある。筆者は一九九四年九月から一九九五年一〇月にかけて、泉州市に所属する晋江市・石獅市で漢族村落の社会組織についての社会人類学的調査をおこなった。その後の一九九七年と一九九八年夏にも短期調査を

実施した。本稿では、こうした調査資料に基づきながら、一九五〇年代から、政治的原因により抑圧されて、壊滅状態になっていた宗族組織の再興の現況を「晋主」儀礼を中心に報告する。

一 容卿宗族の概況

本稿では、石獅市容卿宗族の事例を中心に取り上げたい。容卿村は慣習上の呼び名が村名となったもので、現在も普通に使われている。容卿村は、旧晋江県のほぼ中央に位置するが、行政上は、石獅市靈秀鎮に属する。村から石獅市区までは約三キロの距離にある。容卿村は単姓村で村民はすべて蔡姓の漢族であり、共通の祖先を有する。彼らの祖先は一四世紀中頃の元末に、容卿に移住してきたと伝えられている。それから二四世代を数えるこの蔡姓宗族の人口は八千人を超えており、八つの自然村に集中している。この血縁的村落群は「容卿八郷」ともよばれる。「容卿」は、実は一つの大きな宗族集団であり、巨大な父



中国東南部

系血縁集団の村落群である。昔から、こうした容卿宗族組織はこの地域では大きな影響力をもっていた。

一九五〇年代以前、容卿宗族には族長、長老会などのリーダーが存在し、宗族集団を統括していた。例えば、今世紀三〇年代に活躍していた容卿宗族の族長は、武装集団をもち、「石獅皇帝」とよばれる強力な人物であった。また、全宗族が所有する大族譜、小宗が所有する族譜、房が所有する房譜が存在していた。さらに、「公業」とよばれる土地財産など、祖先祭祀を支える族産ももっていた。そのほかに、容卿宗族は少なくとも清末には「義学」（宗族子弟を養成する私塾）を設立していた。今世紀初頭から、こうした義学は「学堂」とよばれる、大祠堂に移され、多くの宗族の有能者がこの塾で啓蒙教育を受けたとされる。

巨大な容卿宗族は、血縁関係によって細かく分節しており、大宗、小宗、房族という各レベルの分節構造をもち、それぞれ祖先祭祀の場をもっていた。容卿宗族は「大宗」（大宗族）とよばれ、一世祖の三人の息子の子孫はそれぞれ長房、二房、三房といった分節を構成し、「小宗」（小宗族）とよばれる。各小宗の下位において、さらにいくつかの基層的分節である「房」がある。また、大宗のレベルでは、容卿宗族全体の始祖を祀る大祠堂（または家廟）をもち、三つの小宗はそれぞれ各自の先祖の位牌を祀る祠堂をもうける。それぞれの房族も祖先祭祀の場である「祖厝」

をもっている。一六世紀中期、明代の嘉靖年間（一五二一—一五六六年）、大宗と小宗レベルの祭祀空間が形成され、遅くとも清の嘉慶年間（一七九六—一八二〇年）から、現在のような三つのレベルの祖先祭祀の空間が存在していた（図1）。こうした大宗族の各分節にきちんと対応する祖先祭祀の場の構造は、典型的な形態であるといえる。

容卿宗族の組織は祖先祭祀を通じて統合された。大宗族レベルでの祖先祭祀は、「祠祭」という大祠堂（または家廟）でおこなう年二回の「春冬二祭」である。そのほかに、清明節の始祖の墓参があり、これは「墓祭」（「献紙」、「掃墓」ともいう）とよばれる。これに対して、小宗レベルでの「祠祭」は年一回の「祭冬」

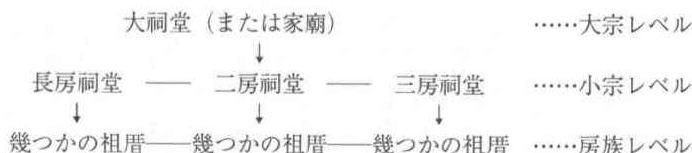


図1 容卿宗族の祭祀空間の図式

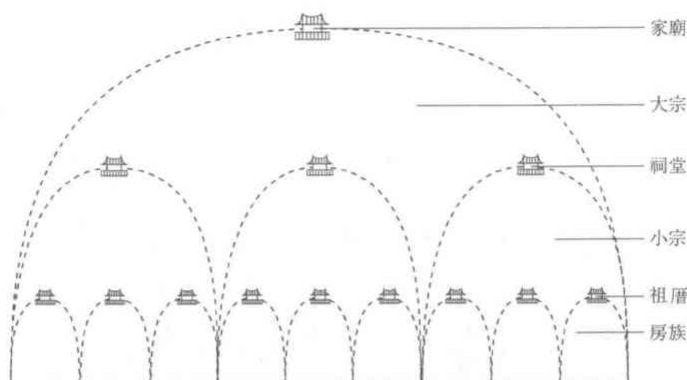


図2 容卿宗族概念図

と清明節頃の墓祭がある。房レベルでは祖先祭祀が最も頻繁で、年八回もおこなわれる。これらの祖先祭祀がそれぞれの集団の関係を密接にし、さらにそれが宗族レベルでの祖先祭祀によって、実際上も観念面でも統合されるのである。このように発達した宗族の祭祀空間は、この地方では、ほかの多くの大宗族村落にも見ることができ（図2）。

中華人民共和国成立後、政府は宗族組織を封建社会の産物として否定し、徹底的な消滅を図った。中央政府は村落にまで、組織の網の目を張り巡らし、強力な行政組織をつくりあげて、村落社会においても権力を掌握してきた。また、集団農業化や土地私有制の廃止などによって、宗族を支える社会経済的基盤が失われた。とくに、一九五〇年代末の「大躍進」と一九六六年から一〇年間にわたっておこなわれた「文化大革命」のような、激しい政治運動が繰り返されるにつれて、宗族組織は大きな打撃をうけ、社会的な役割をほとんど失い、その存在自体も希薄になった。容卿宗族も一九八〇年代までに衰弱の途をたどりつづけたのである。

祖先祭祀の場については、大宗の大祠堂の祭祀機能は、一九五〇年代の初めまでは維持されてきた。長房小宗の祠堂はよく保存されていたが、祠祭は長い間おこなわれていなかった。二房小宗の祠堂は一九五〇年代までに倒壊したが、それまでは年一回の祠祭を続けていたという。三房小

宗の祠堂は清末に火事で焼失し、財力不足のために、修復されないままおかれており、小宗での祠祭も規則的におこなわれなかった。また、一九五〇年代に入ってから、残った大小宗の祠堂での祖先祭祀はすべて中止となり、位牌や族譜が燃やされ、建物は倉庫や医療室として使われた。さらに、大小宗のそのほかの宗族活動も禁止された。つまり、大宗の大祠堂と小宗の祠堂は、一九八〇年代末までに、祖先祭祀の機能を失ったのである。それによって、大宗・小宗は集団的統合を弛緩させることになり、それと同時に、房族レベルの祖先祭祀もおおやけにおこなわれなくなった。祖厝は老朽化が進み、倒壊したのも少なくなかった。このため、容卿宗族はしだいに弱体化していった。

一九八〇年代に入ってから、「改革開放」政策の下で、中国の政治・経済環境が大きく変わり、閩南では容卿宗族などの宗族組織が急速に再興してきた。容卿宗族の再興は、大宗・小宗祠堂の再建と、そこの「晋主」儀礼の実施をめぐって展開され、実現したものと考えることができる。

二 「晋主」の準備

——宗族復活への始動

「晋主」儀礼は、これまでの中国の伝統的社會組織についての社會人類学研究ではほとんど取り上げられなかった。

た。しかし、宗族統合にとって「晋主」は最も重要な儀礼である。「晋主」は「進主」ともよばれる。晋主の「主」は「神主」、即ち祖先の位牌を意味する。晋主とは、祖先の位牌を祠堂に編入・供養する儀礼である。位牌はほとんどが木製のため、神主のことを「木主」とよぶこともある。それは二つの木版を挟んで作られる。神主の中には祖先の諱名、息子の名などが記されている。

閩南では、実際に晋主に使われる位牌を詳細に区分すると、「枋」とよばれる先祖の集団的な大きな位牌、「神主」とよばれる夫婦合祀の位牌、および「長生禄位」（禄位ともいう）とよばれる健在する宗族成員（夫婦合）の位牌といった三種類に分けられる。そのうち、配偶者が亡くなった場合、位牌は「半禄」とよばれる。長生禄位は、「禄皮」とよばれる赤い絹（または赤い紙や布など）で神主を包んだものである。その表面には夫婦の名前と「長生禄位」が記されている。夫が亡くなった場合、長生禄位の上部の絹を切って外し、神主の上部を出すことであらわす。これを「下半禄」という。妻が亡くなつて、夫が健在である場合、長生禄位の下部の絹を切って外し、神主の下部を出すことであらわす。これを「上半禄」という。長生禄位をもつ夫婦がその後ともに亡くなると、次回の晋主の際に、いわゆる「剥禄皮」で長生禄位の絹を外し、禄位を神主に変えるのである。禄位が先祖の位牌と一緒に祠堂に奉られ、祭祀

されることは、他界にいる祖先と現世にいる宗族の成員が、互いに不可分な存在であることを強調しているのである。閩南では、晋主儀礼はこうした神主、枋および禄位を含む宗族成員の位牌の祠堂への「定期編入」の儀式で、数年か十数年に一度しかおこなわれない。とくに祠堂再建に伴い、すべての位牌を対象とした晋主儀礼がおこなわれるのは、半世紀以上ないしは一世紀に一度が普通である。

一般的に、晋主は祠堂でしかおこなわれない。容卿宗族においては、大宗や小宗の祠堂や家廟で、この儀礼をおこなうことができる。これは、宗族の祖先祭祀の空間と位牌設置の關係、ひいては祭祀空間の分節化、ないし宗族組織統合のあり方とかわっているものといえる。

祖厝は、宗族中の小宗の下位分節である房族の祖先祭祀の場である。宗族の老人の死亡後、その位牌はまず、祖厝におかれて供養される。しかし、そこに位牌を供えることは房族の祖先にしか認められない。したがって、遅かれ早かれ祠堂に入って宗族の祖先の仲間に入るのは、統合する宗族集団にとっては、まるで死んだ祖先がおこなわれなければならない「通過儀礼」である。通常は、一定の年月（五年、一〇年といった期間は宗族により異なる）を経て、祖厝に貯まった位牌（神主と枋）を集め、晋主儀礼の際に祠堂の祭壇に入れて、すでに祠堂で供養された位牌と合祀することになる。よって、祖厝の大庁の祭壇には、祠堂に

編入するための晋主儀礼を待つ房族祖先の位牌を祀るのが普通である。祠堂に編入した後の古い位牌は燃やされ、その灰は海に捨てられる。

祖厝に供養する位牌には、こうした晋主を待つ神主のほか、晋主の資格をもたない位牌がある。例えば、子孫をもたないため、正式の宗族成員にはなれない未婚の男性死者の神主は、宗族の祠堂に入る資格をもたないので、その神主は祖厝で供養するしかない。しかし、長生禄位は絶対に祖厝におかれることはない。禄位は晋禄条件をもった宗族成員が晋主準備の段階につくられたものである。このため、祖厝におかれる位牌の数はそれほど多くない。例えば、一九九五年二月の時点で、約六五〇人ほどの成員がいる西坑房族の祖厝の祭壇には、大きさが違う三四基の神主が五段におかれていた。神主は死者の葬儀終了の際におかれたため、特定の秩序を持たず、混乱しているように見えた。祖厝では、年中行事である八大節の際に、房族の各世帯が供え物を持ち寄り、「孝公媽」とよばれる祖先祭祀をおこなう。そのほかに、「做忌」（命日の祭祀）のような家族的な祖先祭祀も、時々おこなわれる。

祠堂は小宗の祖先祭祀の場である。各小宗の祠堂は房名を付けて、「長房宗祠」「二房宗祠」「三房宗祠」となっており、さらに祠堂門の裏面に始祖の名前付きの祠堂名もつけられる。容卿宗族では、小宗成員の神主や枋や禄位がこ

こで晋主儀礼をおこなう。このため、村人の位牌が最も集中している場所は小宗の祠堂であり、その中に、容卿始祖と小宗始祖をはじめ全小宗の祖先の神主、枋および長生祿位を奉っている。それらは「左昭右穆」の序列によって順番に整然と配置されている。祠堂では、年一回祭冬という冬の祖先祭祀をおこなう伝統がある。

家廟は祠堂と異なり、宗族の始祖や官僚になった祖先しか祀らない。そのため、家廟に晋主できるのは宗族の始祖などごく少数の祖先だけである。長く続いた封建時代には、庶民に家廟を建てる資格はなかったが、清代には、九品官以上の者が家廟を造ることが許され、祖先を祭祀することができた。清末、庶民に対する家廟建ての制限が緩やかになり、富豪ならば家廟を造れることになった。容卿宗族では、一八四一年に金持ちの成員が出資して、同宗族の大祠堂を家廟として再建した。その中には、同宗族の始祖と三つの小宗の始祖、さらに出資者の先祖の位牌を奉っていた。それから百年近くの年月を経て、一九三二年、宗族の成員に募金をおこない、「祠堂」として再建され、全容卿宗族の晋主がおこなわれた。後述のように、一九九六年に、容卿宗族の大祠堂は「蔡氏家廟」として復活したのである。こうした大宗、小宗、祖厝はそれぞれ祖先祭祀の場を明確に区分したり、相互補完的な関係で結び付いたりして、巨大な宗族集団を分節により異なるレベルで統合すること

になった。三つの祖先祭祀の空間は、系譜上で表現される構造と同じように、宗族の包括性と房族の分裂性によって現れるピラミッド形の構造である。また、こうした宗族の祭祀空間の分節化は宗族集団の発展過程での分裂を象徴する一方、長い宗族の歴史上では、宗族集団の統合は晋主によって維持されてきた。すなわち、晋主儀礼は宗族の統合にとつては、不可欠な儀礼といえるのである。

現在の閩南で見られる宗族の再興は、まず、晋主の再開をめぐる宗族的活動の再活発化によって始まったのである。また、ほとんどの宗族の晋主は祠堂再建、族譜再編と合わせ、三点セットの形でおこなわれている。これは一九五〇年代からの中国の特別な歴史的経緯のあらわれである。晋江市や石狮市においては、宗族の晋主儀礼も、祠堂再建、族譜再編とともにおこなわれるようになった。

晋主の準備段階は宗族の再興を達成する過程といえるだろう。なぜならば、すでに晋主の準備の段階で、宗族の活動はしだいに活発になっており、宗族組織が再構成され、大きな社会的役割をはたすようになってきた。これらは、晋主の準備段階における宗族族長および長老会の社会的地位の再確立、宗族成員の系譜関係の再確認、宗族財産の再蓄積、宗族組織の社会的役割の増大などの現象から明らかにすることができる。

(一) 宗族族長および長老会の社会的地位の再確立

閩南では、宗族の再興は、村落の老人会⁽¹⁵⁾に担われている。一九八六年、「石獅市容卿老年協會」とよばれる容卿老人会が設立された。容卿老人会は行政村に拘らず、容卿宗族を主体として構成されたのである。老人会設立後、老人会の直接の関与の下に、これを中心次第々と宗族組織がつくられた。例えば、小宗、大宗では次々と祠堂や家廟の再建と晋主にあつての様々な委員会を設立し、おおよけに宗族の活動を再開させ、宗族組織の再興を促進してきた。こうした委員会は、事実上、現代社会における宗族長老会となっているのである。

一九九〇年代初期、小宗レベルでは、「宗祠重建（再建）準備委員会」が設立されている。例えば、三房小宗の祠堂は一九九三年一月に、二房小宗の祠堂は一九九四年九月にそれぞれ落成したが、それらの再建前に設立された「宗祠再建委員会」が、小宗の祠堂再建計画の立案、実施、資金調達など、多くの作業をおこなった。これらの活動は、事実上、宗族活動の再開であり、宗族組織の再興をうながしたものである。

「容卿三房宗祠重建委員会」といった宗族的組織の設立後、まず小宗のレベルで、宗族の再興や再統合が力強く推進された。小宗の祠堂再建をめぐるのは、多くの作業が必

要だが、こうした作業を中心においておこなった「容卿三房宗祠重建委員会」の活動もまた、宗族組織の再興をうながしたのである。

容卿大宗族の大祠堂を、家廟として再建するに当たって結成される大規模な委員会も、老人会を中心に指導部が構成されていた。家廟の再建は、国内外の容卿人が共同でおこなう容卿宗族の大事業なので、再建委員会の構成員も国内外の有力な「族親」（同族）を多く抱え、その数は一三六名にも達した。一九九四年八月三十一日、こうして「容卿蔡氏家廟重建董事会、監事会」が結成され、同年十二月二日には「容卿蔡氏家廟重建簡章」を制定し、董事会や監事会の構成、権力と義務、予算や財務管理、再建の内容、風水師や設計者の招聘などを明確に規定した。

こうした過程を経て、宗族の族長が再び出現したかのようだった。容卿宗族の場合では、老人会長は実際には現代的な族長であった。彼は、長年にわたって容卿老人会の責任者として村人に奉仕しており、とくに、村落内外の紛争の調停に大きな役割をはたしてきた。多くの閩南の農村と同じように、容卿も村落内外の紛争は、宗族間や房族間の紛争へと発展する傾向があり、解決には宗族の有力者の関与が不可欠なのである。これらの事件への関与と解決を積み重ねて、彼は宗族内での威信を高めてきた。また、祠堂での晋主の実現をめぐる多くの宗族的事務に直接的かつ全

面的に関与してきたので、村内外の人々によって族長に認められたのである。彼は「三房宗祠管理委員会」の副主任、「容卿蔡氏家廟重建董事会」の第一副董事長など宗族の重要ポストについている。宗族活動の計画や実施、宗族会議の召集と主催、決議案の実現などでは、中心的な役割を担っていた。例えば、膨大な家廟再建の資金の調達や族譜の再編、小宗祠堂、家廟内の多くの賛辞などを書いた掛け物、再建される祖墓の碑文などの編纂や訂正も担当した。

(二) 宗族成員の系譜関係の再確認

系譜関係の再確認は晋主をおこなうときの基本的な要件であり、宗族集団の再興と存続にも不可欠な条件である。容卿宗族では、系譜関係の再確認は族譜の再編からおこなわれる。巨大な容卿宗族が国内外に広く分散居住しており、さらに過去の一連の過激な政治運動中に焼失された族譜が多かったため、数十年前に中止となった族譜の再編はたいへん複雑な作業である。老人会長は宗族の長老らを召集して、わずかに残った古い族譜を整理したり、村民の系譜関係を詳細に調査した数か月後に、宗族集団の系譜関係を明らかにしたうえで、小宗や大宗の族譜を再編した。例えば、一九九三年末に『済陽容卿三房蔡氏房譜』（全四冊）の再編が完了し、一九九六年一月、『済陽容卿蔡氏大族譜』も再編された。また、各房族の「家譜」の再編も次々とおこ

なわれた。

村民の系譜関係の調査は、宗族の再興には非常に大きな役割をはたしている。ここでその調査方法を記する。宗祠再建委員会は、各房族出身の委員にそれぞれの房族の系譜関係を明らかにするよう命じた。これらの委員は各房族のリーダーで、彼らは残っている族譜を参照し、調査票による各家庭の調査をおこなった。

その調査表は「晋邑泉峯蔡氏修譜資料登記表」と題され、これには次の一七項目が盛り込まれた。

- ①房族 ②柱¹⁷ ③姓名（現用名） ④字輩¹⁸ ⑤別名（字または号） ⑥年齢（数え年） ⑦性別 ⑧生年月日（旧暦） ⑨学位 ⑩大学卒業 ⑪元の職位 ⑫国内外の住所または定住地の住所 ⑬配偶者の姓名 ⑭配偶者の年齢 ⑮配偶者の生年月日 ⑯配偶者の実父（義理の父）の姓名と住所 ⑰娘の配偶者（婿）の姓名と住所

この「登記表」には「譜系材料事項説明」が付され、それには各個人について、例えば成人男子であれば、内容は次のようであった。

- ① 両親の姓名、本人の姓名および字輩、年齢、生年月日。
② 配偶者の姓名、両親の姓名と出身村、年齢、生年月日。

③ 娘をもつ人で、その娘が結婚した場合の相手の姓名。
④ 海外に居住する「僑親」、または国内に定住する「堂親」については、居住地の住所。

⑤ 未婚の女子の名前、生年月日は不要。

⑥ 大学卒業、または学位を取った人はそれを明記。

⑦ 子供を他姓に養子に出した人は、これと養父の村と姓名を明記。

⑧ 亡くなった人の死亡年月日、時間および死亡時の年齢を明記。

⑨ 幼小時に亡くなり名前も残っていない子供について、死亡の原因と死亡時の年齢を明記。

⑩ 配偶者が亡くなり再婚した者はその事を明記。

⑪ 同姓結婚者は、嫁に改姓が必要（母の姓或いは「拝姓」を取ってよい）。

⑫ 他人の「嗣子」（養父の家業、系譜を継承する養子）、「兼承者」（自分の親を継承しながら、他人をも継承する人）となる人は、それを明記。

系譜を明らかにしようとしたこの「登記表」、特に註として付された「譜系材料事項説明」は、調査の対象となつた房族を構成する村民に、宗族意識の強化を促す要素を多く含んでいる。例えば、名前のうち同世代の人が共有する輩字に基づく「字輩」の確認は、かつて宗族が重視してき

た「人倫序列」の再確立につながるものであり、女子の扱いは宗族集団における「重男軽女」「男尊女卑」といったかつての観念を思い出させる。それは、もともと女子は族譜に入れられず、正式の宗族集団の成員にもなれなかったというかつての伝統をこの新族譜も継承していることを意味する。また、同姓結婚者の場合には妻に対して別姓への改姓を要求することは、宗族内部における結婚禁止という伝統を再確認させる。さらに、「嗣子」と「兼承者」の明確な区別を要求することは、「祖先崇拜」「孝道」「系譜関係」「人倫序列」などの従来の宗族観念を再確認させることになる。こうしてこの調査は、人々にあらためて宗族意識を喚起させることとなつたのである。

宗族存続の根幹である系譜関係は、祠堂再建と同時に進められた族譜の再編の中であらためて確認されたのであり、それによって宗族の人々どうしの親疎関係が区分され、権利と義務が明確にされている。つまり、宗族集団の系譜関係を再確立したのである。それはまた祠堂落成においておこなわれる晋主儀礼での位牌の序列を確定することでもあった。

(三) 宗族財産の再蓄積

宗族の共有財産は、宗族の祖先祭祀を支えるものであり、宗族集団の統合にとっては不可欠な要素の一つである。宗

族の共有財産は「族産」、または「公産」といい、一九五〇年代以前には、族田をはじめ、山林、建物、貸し借りの資本、水利、交通などの公共施設を含んでいた。容卿宗族では、一九五〇年代まで、こうした共有財産が保持されていた。例えば、大祠堂の祖先祭祀を支える容卿宗族所有の族田が三・四畝（一畝は約〇・六六七アール）もあった。族田の作物を売った収入によって、祠堂の祭祀費用をまかなっていたのである。祖先祭祀の主催は毎年各小宗が輪番でおこなっていた。族産があまり多くない場合、祭祀費用の不足分は、担当する小宗が調達することもあったという。

中華人民共和国成立後、土地私有化は廃止され、さらに、宗族を徹底的に消滅させようとした政治情勢の中、宗族の財産は当然ながら消失してしまった。しかし、宗族財産の再蓄積は、一九九〇年代に入ってから祠堂再建と晋主をめぐる資金集めに始まり、祠堂の落成と晋主の実施までにその過程が完了したのである。現在では、宗族財産の再蓄積は、土地私有制の廃止のため、土地財産と関わらずに、金銭の徴収と寄付を主要な方法としておこなわれる。容卿宗族では、一九九〇年頃から一九九五年頃まで、祠堂や家廟などの建設費と晋主、晋禄費の徴収、さらに内外の同族からの寄付金によって、膨大な資金を集めた。こうして宗族財産の再蓄積は達成されたのである。

祠堂や家廟の再建資金の調達は、主に「収丁份」、晋主、

「捐資」の三つの項目でおこなわれる。収丁份は、「人丁錢」「人丁款」ともよばれ、宗族の男性（成年男性は「丁」という）の数に応じて徴収する現金である。容卿では、収丁份の対象は、未成年も含む宗族男性の全員である。この徴収法は宗族の男性重視の伝統的な觀念のあらわれといえる。村人のうち、他の宗族に属するごく少数の者を除く男性全員はこれを支払う義務をもつ。徴収の金額は、宗族の長老により、宗族の人口、資金力と建設費用を考慮して決められる。容卿三房小宗の人口は多いので、小宗祠堂再建の際に、男性一人あたり一〇元（一元約一五円）を徴収した。逆に、隣の二房小宗の人口は少ないため、二房小宗祠堂再建の際に、男子一人あたり五〇元を徴収した。また、石獅市祥芝鎮關美南屏蔡氏祖序再建の際には、男子一人あたり二〇〇元を徴収した。このように、収丁份の金額には各地でかなりの差が見られる。

晋主の費用といっても、小宗の場合では、実際には晋主の他、晋禄（半禄や全禄を含む）、晋枋を含むすべての金額を指す。晋主や晋禄は人々が自分の先祖や自分のためにおこなうことから、自分の意志で決めることができる。このため、その費用は強制的に徴収されず、晋主・晋禄をおこなう家族が負担する。しかし、容卿では、村人は久しぶりの晋主に対して、かなり熱心であった。

晋主などの費用も宗族の長老によって決められる。例え

ば容卿三房小宗の場合、祠堂再建委員会は晋主・晋祿の条件と費用について、以下のように定めている。

「關於晋祿位晋神位幾点説明」

(晋祿位晋神主についての説明)

- ① 正式に結婚した夫妻は、長生祿位を作る資格がある。
一人あたり一〇〇〇元。
- ② 正式に結婚した夫妻で、夫が健在、妻が亡くなった場合、上半祿位を作る資格がある。一人あたり七〇〇元。
- ③ 正式に結婚した夫妻で、夫が亡くなったが、妻が健在の場合、下半祿位を作る資格がある。一人あたり七〇〇元。
- ④ 正式に結婚した夫妻で、二人とも亡くなった場合、神位を作る資格がある。一人あたり五〇〇元。
- ⑤ 祿位を作る場合には、まず、家族の上の三世代(本人を含む)の申込みが必要で、その後、下の世代の申込みができる。(上の世代に)孝道を尽くす。
- ⑥ 祿位を作る男子は、一律に字輩の姓名に拠って申込みなければならない。もし、別名があれば、申請表の中に書くこと。
- ⑦ 祿位、神位を申込み人は、旧暦八月十五日までに、強房下厝秀山公祖厝の事務係に申請表と料金を渡すこ

と。

二房小宗の場合、全祿が七〇〇元、半祿が五〇〇元、神主が三〇〇元、枋が三〇元である。これによって、かなり膨大な資金を集めることができた。例えば、三房小宗は約四二万円を調達していた(表1)。

「捐資」とは宗族の成員が宗族に資金を寄付することである。これは、宗族の長老が、祠堂再建と晋主を理由とし、各種の手法でおこない、村人に潜在する宗族意識を刺激した上で実現されたのである。例えば、容卿蔡氏家廟重建董事会が国内外の同族に配布する募金書では次のように寄付を呼び掛けていた。

「容卿蔡氏家廟再建の募金書」(全文)

一九三二年に再建される前は、容卿蔡氏宗祠は「容卿蔡氏家廟」であったが、この度、国内外の同族との議論の結果、家廟復活のためにもう一度再建することを決定した。工事費(家廟、護龍、庫池)は人民元で一五〇萬元を要する見込みである。「祖宇」(家廟を指す)の再建は我が宗族の榮譽にかかわる重大かつ神聖な事業であり、同族全体が全力で協力しなければならない。このため、再建の募金についての規定は、この書面によって国内外の同族に通知する。

表1 重建三房小宗収付總帳公布（三房小宗の祠堂再建に関する収支表）

摘 要	収入 金額	支出 金額	余 額	
丁份収入（2727人）	27665.00元			
寄付金収入	510144.00元			
晋主、枋収入	419890.00元			
その他の収入	3757.00元			
建築工事雑費支出		136501.65元		
工事代金支出		417400.00元		
晋主関係費用支出		269014.55元		
本期累計残高	965056.00元	822916.20元	142139.80元	
全 祿	半 祿	神 主	枋	合 計
109人	173人	361人	181人	
109080元	121180元	180580元	9050元	419890元

財務組 1994.2.6.

一、人民元一〇〇〇元以上を寄付する者は、寄付金額の順により、寄付名簿に載せて、全員の高名を石碑に刻み、その名を世に永遠に保存する。

二、人民元五〇〇〇元以上を寄付する者は、寄付金額の順により、個人の写真を「影彫」（閩南の特殊工芸の一つで、写真を黒白の方式で石に刻むことで、永遠にその写真を保存できるといわれる精美な工芸品）額に載せたうえ、影彫の下側に寄付者の名と金額を石碑に刻み、その写真と名を世に永遠に保存する。

三、募金期間は、今から来年旧暦正月末までとする。国内外の我が容卿同族が祖先を尊敬するという立派な伝統をもっていることを世に知らしめ、祖宇が再び輝くよう、それぞれの心意をあらわし、それぞれの力を獻じ、誠心からの寄付を期待する。協力のほどを願いたい。

容卿蔡氏家廟再建董事会 啓

一九九四年十二月五日

実際には、再建された家廟と小宗祠堂の内壁に、寄付者とその金額を金字で刻む大きな「芳名録」（寄付者名簿）の碑文がはめ込まれた。この地方では、再建された祠堂や家廟に、ほとんど例外なくこのような寄付者を表彰し、後世に残そうとした碑文がある。また、容卿家廟のような高額寄付者には顔写真の影彫を祠堂内壁にはめ込むこともよ

く見られる。

この地方では、寄付金は宗族から集めた資金総額のうち、トップを占めることが多い。表1にもそれがあらわれている。

再蓄積した資金は、まず、立派な祠堂や家廟の再建に使われる。例えば、容卿三房小宗祠堂の建設費用は約五五萬元、さらに家廟の建設は一七〇萬元を超えるほど膨大になる。晋江市東石鎮玉井戸の蔡氏宗族は、祠堂のほか、「玉郎（始祖名）記念樓」という五階建ての建物と、豪華な装飾の広大な始祖の記念霊園を持っている。そして、「記念樓」は宗族成員活動の場所として使われている。

また、宗族の再興を象徴する祠堂落成の式典と晋主儀礼の挙行には、膨大な宗族資金をかけるのが通例となっている。例えば、盛大におこなわれた容卿三房小宗祠堂の落成式と晋主儀礼では約二七萬元が使われた。式典の規模が三房よりずっと小さな二房小宗の落成式典と晋主儀礼にもやはり約一三萬元が使われた。容卿二房小宗式典と晋主儀礼の支出統計を参照されたい。そのなかには、次のように支出の細目も明示されている。

「二房小宗慶典支出表」

一、礼金

高甲戲（閩南伝統劇）

一二五七六二元
一一三三〇〇元

僧侶

南音（車代を含む）

西洋楽団

ビデオ撮影

山家（風水先生）、大工、土工、石工

鼓吹（伝統楽器の演奏）、木偶（傀儡劇）

点主など

二、礼品（贈り物）

Tシャツ

傘

三、宴会費用

食卓、食器、料理人

点心、レモンジュース

タバコ、酒、コーラ

食物材料

四、祠堂再建碑文など

「再建誌」、芳名録の彫刻、金箔の貼り

枋、木主の補欠

石亀一匹

五、接待費

漳州宗親の接待

宗親を出迎える学生の食事代

彩帯、彩旗、Tシャツの文字の印刷、名札など

二四五〇元
二四五〇元
二〇〇〇元
一二〇〇元
三六八〇元
一六〇〇元
八二元
一八八五〇元
八四〇〇元
一〇四五〇元
五七九五六・八〇元
八四〇〇元
一一〇四元
七八九四元
四〇五五八・八〇元
二八三〇元
一二九〇元
四六〇元
八〇元
四〇九五・九〇元
一三三三元
七四六・七〇元

六、迷信費

爆竹、銃を鳴らす

二〇一六・二〇元
一五七七・二八〇元

金紙（冥錢）

六九五五・六〇元
一五一〇元

紙で造る金亭、煉瓦、大亭、金花など

彩燈、赤い絹と布

一〇四八元
二〇七一・四〇元

祭品、祭物（祭祀用品、供え物）など

四一八七・八〇元

七、その他の費用

彩門、傀儡劇台を架ける、

劇台のテント、材料を借りる代金など

二日間の電気代

一一七〇元
四五五元

招待状配布の交通代、手伝いの賃金

拡声器の修理代など

七五四元
三三〇元

招待状、工作証、紙、コピー代

電気製品、雑品

九九三元
五九八元

以上七項目の合計支払金額

一一九五五七・五〇元
一九九四年十月十七日

宗族再統合の達成を象徴する祠堂の再建と晋主儀礼の挙行によって、宗族財産の再蓄積の第一段階が終了したと考えられる。次に、蓄積した族産の管理と運営の段階に入る。

(四) 宗族組織の社会的役割の増大

宗族の長老は宗族的な組織と活動を急速に復活させ、そのことによって、村落において指導的な地位を固め、事実上、「村面委」（村の共産党支部と村民委員会の略称）に並ぶもう一つの権威の中心となった。すなわち、村落社会をコントロールする一大勢力となったのである。例えば、晋主、晋祿は小宗祠堂の落成に際しておこなわれる儀礼であり、祠堂再建の工事とは直接的な関係がないにもかかわらず、容卿三房祠堂再建委員会はこのらの儀礼にかかわる事柄も討論し、上述した「關於晋祿位晋神位幾点説明」を決定した。この規定は宗族再興や再統合を促進する内容を多く含んでいる。位牌作りのほか、孝道の強調（健在する上の世代が祿位を作らないなら、下の世代も作れないのは「長幼有序」という宗族が重視する儒教觀念のあらわれ）、字輩の強制使用なども宗族の「人倫序列」の再確立に役立ってきた。これらの祠堂の再建と晋主をめぐる活動が、村民の宗族意識を急速に取り戻すことになったのである。それと同時に、村落社会における宗族組織の社会的役割はますます大きくなった。

要するに、晋主の準備段階は、宗族の再興を達成する過程と考えることができる。そして、晋主儀礼はこうした宗族再興の完遂の際におこなわれるのである。

三 晋主儀礼の举行

宗族の再統合の象徴プロセス

一九九〇年代に入ってから、特にこの数年間、閩南農村では晋主はブームになっており、頻繁におこなわれている。例えば、晋江市東石鎮の蔡姓九宗族のうち、一九九四年一月末の時点では、すでに五宗族が晋主をおこなった。石獅市も同じであり、この数年間、容卿周辺の村落においては半分以上が晋主をおこなった。容卿村では、一九九三年一月に三房小宗、一九九四年九月に二房小宗、一九九六年一月に容卿大宗族が相次いで晋主儀礼をおこなった。一九九八年一月、石獅市祥芝鎮の蔡氏家廟も晋主をおこなったのである。

晋主は宗族の下位分節である房族が再統合された後おこなうのである。房族の統合は一九八〇年代までに弱まりながら基本的に維持されてきた（主に祖厝をめぐる風習により維持される）。一九八〇年代に入って、祖厝での集団的祖先崇拜も再び盛んにおこなわれるようになってきた。一九九〇年前後、多くの房族は祖厝、少なくとも祖先祭祀の場所である祖厝を修復していた。房族の再統合はおおよけの集団的祖先祭祀の再開と祖厝の修復に象徴される。一九九〇年頃、容卿の房族の再統合は完了していたと見なして

よいと思われる。

房族の宗族的統合は、上位の小宗の統合に観念的、組織的基礎をもたらし、小宗の統合を始動させたことになる。小宗レベルの宗族的再統合は小宗祠堂での晋主儀礼を標識として、その過程の完了に象徴される。小宗での晋主は小宗レベルの宗族再興の総仕上げとなるものである。そして、最後に、大宗の再統合に至るのである。

私が調査した容卿三房小宗、隣の古宅村、石獅祥芝鎮閩美厝、晋江東石鎮玉井戸の蔡姓の晋主は、実際には、晋主儀礼の他、祠堂落成、族譜再編完了などの祝い事にかかわる多くの儀礼を含む総称であったが、その過程は五―一五日間にわたった。それは儀礼の多さを原因とする以外に、各宗族の風水をも考慮したため、宗族長老と風水師との思惑を配慮した上で決めたのだった。

隣村の古宅村の晋主儀礼では、村の「慶典籌備（式典の準備）委員会」が儀礼の前後一週間の行事とその内容を決定する。また、この委員会は、儀礼の直前に、「古宅村蔡氏宗祠晋主慶典委員会」に変わり、儀礼の執行にあたった。村民にとっては晋主期間中、彼らの活動は宗族長老に規定されているため、宗族の一員として各儀礼に参加し、「規定」に沿って行動しなければならない。以下に古宅村と晋江市東石鎮玉井戸の宗族が定めた「規定」を例として述べていく。一九九五年三月、「古宅村蔡氏宗祠晋主慶典籌委會」が

作った「古宅村蔡氏宗祠落成晋主慶典日程安排」は次のように規定している。

古曆三月二十一日、全村各家庭は大掃除をして、村の環境を清潔にする。

二十二日、フィリピン、香港に居住する宗親（同族）を迎え、各「角頭」（房族）は祠堂で「対聯」（対句を二枚に書き分けて、入り口、壁面、神棚などに左右に分けて貼ったもの）、彩色旗（赤旗）、赤絹を受け取り、各世帯に配布する。

二十三日、午前、各祖庁、各世帯は灯籠を掛けて、飾りつけ、赤い対聯を貼る。午後、各世帯は祠堂で神主と禄位を受け取る。

二十四日、午前七時に祠堂で「紅圓」（赤い団子）を供え、八時に各祖庁で紅圓を供え、各祖庁の「火化」（火で燃やす）を必要とする神主を祠堂に集めて、一緒に火化する。十時から午後二時に、各世帯は祠堂で「土地」（土地公）を祭祀する。「金」と「銀服」（異なる二種類の冥錢）と一緒に燃やす。二時に各世帯は各祖庁に集まって、神主を奉じて、祠堂に送る。

二十五日、真夜中の一時から三時に晋主をおこない、五時に各祖庁は枋位を迎え、各自の祖庁に戻り、六時に各世帯は「棗灯」（なつめの形の小灯籠）、「衣食」（供え

もの）、「風炉」（炙り炉）を用意した後、祠堂に来て「香燭」（線香と蠟燭）を供え、爆竹を鳴らし、一緒に風炉の火を燃やして、各自の家に戻る。八時に「謝天」（天に感謝する儀礼である天公を祭祀する）をおこない、各世帯は「犒兵」（神様の兵隊をねぎらう）をおこなう。正午、各祖庁は「筵卓」（供物をのせる卓）を用意して「公媽」（祖先）を祀る。午後、「主灰」（位牌を燃やした灰）を深滬海に送る。

二十六日、全村一六歳以上の男丁は全員祠堂に集合し、仕事を分担する。

二十五、二十六、二十七日の三日間、各世帯は祖庁に香燭を供え、爆竹を鳴らす。

二十三から二十七日の夜、各世帯は犒兵をおこなう。金銭の浪費を防ぐため、各世帯が親戚や同郷に感謝する贈り物を用意しないよう協議によって取り決めた。違反すれば、五〇〇元の罰金を取る。

また、玉井戸の晋主をめぐる諸儀礼では、宗族が村民に対する規定は古宅村のものと類似しているが、より詳細に記述されている。

「玉井宗祠落成慶典有関事項通知」

（玉井宗祠落成祝賀式典に関する通知）

一、十月二十四日から各世帯は「彩」(門や龕を飾る模様入り布)、灯籠を掛け、赤旗を立て、赤い対聯を貼って、全面に飾る。

二、「遊祿」…十月二十五日に各世帯は祠堂の広場に集まって、列をつくり、九時から「遊」(パレード)をする。遅刻すれば、各自で責任を負う。道順は西から……(中略)祠堂の広場の東から祠堂に入る。「捧祿者」(祿位を捧げる人)は大門から入り、順番に各「柱」(房族の下位分節)の指定場所で祿位を置いて早く後門から出るなど、混雑を避けるため秩序を守ってほしい。

註① 嫁いだ娘と嫁はパレードに参加することは構わないが、強要しない。

② 祿位に入った者は、全員が「披紅」(赤い絹帯を肩から斜めに被る)をする義務を負う。

③ 捧祿者は、祿位に捧げる赤い盆一つ、披紅用の赤い絹一枚(大人七・二尺、子供四・二尺)を用意する。

④ 遊祿の行列に爆竹を鳴らすのは「慶典会」で決められた者に任せ、隊列が乱れないように、個人が爆竹をかってに鳴らすのを禁止する。

⑤ パレードに参加する子供がもし歩くのに不便なら、各自でオートバイを用意したり、三輪オートバイを雇って乗ってもよいが、隊列の最後に並ぶ。

三、「進主進祿」(晋主晋祿)…十月二十七日卯刻(午前

五時)に決めた。各世帯は時間通りに「炉火」(火を燃やしている風炉を指す)を焚き、各自で用意した爆竹を鳴らす。多ければ多いほどよい。爆音は「可助震龍」(龍を動かして風水が動くと、風水にとつてはよいという意味の風水用語)である。

註① 炉火は各世帯ごとにつくる。爆竹も同様にしてつくる。

② その時間(即ち卯刻)に各世帯は同時に炉火を焚いて、一斉に爆竹を鳴らして、盛大に「進祿進主大典」を祝う。

③ 「上八卦」(祠堂落成の際におこなわれる道教儀礼の一つ)の際に紅圓を供え、「慶典会」が炉火を焚く。

各世帯が紅圓を用意して、祠堂に供えに来てはならない。個人が祠堂の中で「炉火」を引火してはいけない。二十七日午前十時頃、各世帯は「五味菜」(五種類の副食からなる供物)、「圓」、灯籠、「財」(紙で作った銀貨)、「金紙」(冥銭)を各自で用意して、祠堂の広場で「焼金敬祖」(冥銭を燃やし、祖先を祭祀する)をおこなう。その後、「床母」(寝台の神様)を祭祀する。その他の「雜札」(他の神様への祭祀を指す)はおこなわず、「以主為貴」(祖先祭祀を最優先することを目指す)する。

四、慶典大会は二十八日に挙行が決められた。玉井の名誉のため、この「百載難逢」(百年に一度あえるかど

うかの貴重さ」の盛典をどうしても成功させるように努力する。各執事者は決められた任務の執行に全力を挙げる。

五、各世帯はしっかりと安全を守らなければならない。盗難、火事を防ぐ。

附① 赤旗は「慶典会」が無料で各世帯に一本ずつ配る。もし旗を増やしたくて、「五彩旗」を立てたいなら、各自で用意してもよい。

② 対聯を自分で書きたい場合、各柱の責任者から「聯文」(対聯の内容)を取って書く。書けない場合、できるだけ早く対聯を書く人に予約する。

玉井宗祠落成慶典大会 啓

これらの晋主期間中の様々な儀礼を含む細かい「規定」には、宗族集団を統合する役割が見られる。宗族の長老はこれらの一連の儀礼の執行により、村民の宗族的帰属意識や一体感を高め、組織面のみではなく、意識面でも宗族の再統合を達成させようというねらいがあることが考えられる。

晋主期間中の様々な儀礼や活動の展開は、晋主が宗族の再統合を象徴するものであることを示している。三房小宗の晋主では再建された祠堂の落成儀礼と合わせ、「容卿三房蔡氏宗祠重建落成暨附祧慶典」とよばれる幾つかの儀礼が、二週間にわたっておこなわれた。ここでそれを記述す

る。

一九九三年二月二十九日、「篩圓系八卦」とよばれる祠堂落成儀礼がおこなわれた。午前零時三〇分、「系八卦」がおこなわれる。これは小宗の長老たちと建築の石工、大工、土工がおこなう儀礼である。まず、容卿の「境主」(守護神)である「上帝公」(玄天上帝)が神轎に座って「上帝公宮」から迎えられる。神轎は祠堂の大庁で回される。容卿宗族の保護神を祠堂の落成儀礼に加えることは、祠堂ないし小宗の人々を守る意味がある。小宗の長老たちは披紅し、線香を持ち、正面に跪拝する。民間楽団は「大楽」(太鼓を使う祖先祭祀用の閩南音楽)を演奏し、大工、石工、土工は一人ずつ吉祥語を歌い、また、剣を振り回し、「金鷄」(おんどり)のときかを切り、筆で血を取って朱砂と混ぜ、それを祠堂のむな木や柱石や「砿」(大庁のへり)などにつける。また、符を貼り、風炉を屋根に置く複雑な「安土」(祠堂の建築本体に神様を附けさせる)という道教の落成儀礼もおこなわれた。

二時頃、海外華僑を含む小宗内の「福氣」^③がある老夫婦五組は「篩(紅)圓」儀礼をおこなう。赤い団子を「篩」(竹で編んだ物入れのざる)にのせて、披紅の男性と赤い服を着る女性の五組の老夫婦は、その篩を持って大庁内で回してふる。その後、跪拝する。これは「添丁進財」(男子と財産を増やす)を祈る儀礼である。七時頃、上帝公の



祖先の位牌を祠堂に入祀する晋主儀礼の一部（1994年11月）



晋主儀礼に参加する海外の同族（1994年11月）



再建された容卿蔡氏家廟
(1997年8月)



祖墓前で祖先祭祀をしている
容卿宗族の長老
(1994年12月)



晋主の際に行なわれる
「点主」儀式
(1994年11月)

神轎は振られて大庁内を回りながら、飴をまき散らす。人々は線香を持って跪拝する。篩圓系八卦は宗族的立場からの祠堂落成の祝いの儀礼であり、晋主の予備儀礼といえる。

一九九四年一月八日、三房小宗はわざわざ最新型の高級ワゴン車「大霸王」五台と高級乗用車「凌志」三台で、二二〇キロ離れた省都の福州空港に、晋主儀礼に参加するため台湾から帰省する同族の人々の出迎えをおこなった。これらの台湾同族は最近自分のルーツが容卿三房にあると知って、初めて祖先の地に「尋根問祖」（自分のルーツを捜す）や祖先祭祀をしに来たのである。このため、故郷の人々は大いに興奮することになった。それはまた、小宗の「面子」をたてることも意味する。内外の同族が晋主のため帰省することは、宗族的統合にとっても宗族の社会的地位を高めるためにも、プラス面が大きい。福州から石獅に入ったときには、すでに夜七時を過ぎていたが、三房小宗は百台のオートバイと自動車を動員して、市区内で大がかりな歓迎をおこなった。先頭のオートバイは「台湾高雄県永安郷蔡氏宗親回郷謁祖団」という赤旗を掲げて走った。楽団の演奏や爆竹の爆音は三房小宗晋主の前奏曲となり、祭の雰囲気盛り上がった。

翌日、もっと大きな式典がおこなわれた。「恭迎柯蔡宗親蒞臨參加懇親会」（懇親会に参加する柯蔡宗親を心から歓迎する）と書かれた赤い幕が、小学校の校門の上に懸け

られ、「容卿老年協会」の看板が大祠堂の大門の左側に立てられ、鮮やかな新しい衣服を着た村民らは明るい表情で賑わい、あたりには歓楽の雰囲気漂っていた。朝から、台湾やフィリピンからの同族の歓迎式典をおこなうと同時に、三房小宗の総人口を超える三千人（長房、二房の人々と友人、親戚を含む）ほどの規模の行列が組織されて、市内をパレードする。隊列は大きな赤旗を掲げたオートバイを先頭に、警察用三輪オートバイと高級二輪オートバイ百台が二列に分かれてゆっくり走る。すべてのオートバイは小さい三角形の赤旗を掛けている。続いて、伝統的な民間楽団と西洋楽団数組が演奏しながら行進する。隊列は大祠堂から出発して、容卿環村路、慶蓮橋（容卿の東端の標識建築で、容卿の村徴を刻む石碑と亭が建てられる）を経由し、市内に入って、石獅環状道路に沿って、「華僑大厦」という海外華人向けの高級ホテルに、台湾やフィリピンからの同族の出迎えをおこなった。初めて帰省する台湾の同族は皆「台胞謁祖団」の赤い絹帯を被って、笑顔で迎える三房の人々と一緒に街を行進してから、容卿に向かう。市内交通にも影響を与えるほどの大がかりなパレードには、警察官も出動し、その整理にあたった。容卿の村界にある慶蓮橋には「熱烈歡迎柯蔡宗親旅外胞親蒞臨參加慶典」（柯蔡宗親、在外胞親の式典参加を熱烈に歓迎する）の赤い幕が掛けてある。そこに集まった容卿と仕林小学校の学

生や村人は歌を歌いながら踊り、在外胞親を大祠堂に迎え入れる。爆竹の爆音と音楽、歓声で盛り上がった祭の雰囲気には「血濃於水」（血縁関係が至上の意）という宗族間に特有な感情がよくあらわれていた。また、三房小宗の再統合を他の宗族に誇示する意味も大きいといえるだろう。

晋主のパレードは宗族にとつては重要なパフォーマンスであり、その規模、その豪華さ、海外華人を含む大物の参加などは、地域社会にその宗族の力量を誇示する絶好のチャンスとなる。このパフォーマンスを通じて、宗族の社会地位の向上にも役立つ。したがって、各宗族は歴史上の晋主に無かった「パレード」を新たに晋主の内容として加えたのである。これは伝統文化の「創造」と考えられる。三房における、数多くの最新型の自動車で省都まで出迎えることや、百以上のオートバイを出動させるなどの大規模な歓迎式には、容卿宗族の地位にあざわしい宗族的誇示行動という性格が見られる。前述した東石鎮玉井の晋主内容の一つである遊縁も同じ性格をもつパフォーマンスである。また、石獅市でも晋主の際には、大がかりなパレードがおこなわれる。

午後、宗族の男子は線香と神主、禄位を捧げて、小宗祠堂に集まった。位牌は二本の「金花」（金色の紙で造る花）で飾られている。婦人は祠堂に線香を燃やしに来る。在外同族は宗族長老に案内され、バスで容卿宗族が所有する霊

秀山の金相院を参拝する。

一月一〇日、晋主儀礼がおこなわれた。太鼓や楽器を一斉に鳴らしている祠堂大庁で、披紅した国内外の同族の長老は枋、神主、禄位、半禄を持って、「点主」儀礼をおこない、「左昭右穆」という古来の方式にのっとりて順番に位牌を祖龕に入れていく。「点主」は、やはり金鶏のときかの血を朱砂と混ぜ、位牌につける儀礼である。「点主官」（点主担当者への尊称）は血を付けた筆を天に向かって指し、また、自分と位牌を捧げる老人の口に近づけ、息を吹きかけて、位牌に拝んでから、位牌の四隅に点をつける。「生血、天地の気、宗族の方々の貴気を引いて、位牌に付けると、祖先の霊が入る」というわけである。点主官は人望高い知識人しか担当できないのが決まりである。台湾の同族に対するお礼として、台湾の「国大代表」（議員）を勤める人に点主官をしばらく担当してもらった。その後、知識人である宗族長老が点主官を担当した。

位牌を祖龕に配置した後、「天井」に面する大庁のところで、「天卓」とよばれる「天公」（玉皇大帝）を祭祀する高い飾りが机に立てられる。フィリピンの大物華僑、台湾謁祖団を含む国内外の同族の老人は手を洗って、披紅し、線香を捧げて、上帝公神轎を振り、祖先祭祀の儀礼に入る。まず、「天公」「土地公」（土地神。祖龕の左側の土地公龕の中に神位がある）を順番に拝む。土地公に「祭文」（祭

祀の文」を捧げる必要がある。それから、祖先祭祀をおこない、皆ひざまずいて、知識人たる宗族長老は祖先に対して祭文を読み、「合譜」とよばれる族譜再編の完成儀礼をおこなう。次に、点主儀礼と類似する「点譜」をおこない、族譜の箱に入れて封じる。それから、別の長老は祖先に「頌辞」を読み、「東班」と「西班」（司会係り）は「唱和」（供え物を象徴的な名称で唱えるとき、相手は吉祥語で応答したりする）して、供え物を次々と祖先に捧げる。祠堂外では爆竹を鳴らす。祖先祭祀をおこなった後、位牌は祖龕に置いたまま龕門を閉じ、新族譜も箱に置いたままにする。「開譜」日は「開龕門」と同じく、「日師」という占い師の計算により、数カ月後となっている。

一月一日、祠堂大庁において「超度」儀礼がおこなわれた。僧侶は儀礼用の祭壇を設置し、お経を読む。老人たちは立ち、お経、線香、冥銭を捧げて、僧侶に従って、供え物を供えたり、拝んだりする。婦人は線香を燃やす。この儀礼は「消災」（厄払い）、「祈福」（福祈り）、「添丁」（男子増やし）、「発財」（金儲け）などの宗族の発展を祈願するものである。おもしろいのは、僧侶が容卿地方について述べる際、「中華人民共和國福建省泉州府南閩外十九都洋坑三房……」という現代の国名と清代に使われる古い地名を混合して使用することである。「神様は現代の地名は知らないから」というわけである。この儀礼の神秘性がう

かがわれる。

この日、最も重要なのは、同じ姓をもつ村落の人々を招待する大宴会である。朝から、招かれた各同姓村の代表は次々と贈り物（ほとんどは立派な額）を捧げて、迎えに来た楽団に伴われて容卿に入る。三房の人々は道の両側で歓迎する。額の多くは「祖德流芳」「祖耀宗榮」「同氣連枝」「永締宗情」のような祖先を誉め讃えるものや宗親の絆と団結を強調するものである。三房は一三〇余りの額をもらったが、このことは百以上の村落がお祝いに来たことを示す。

宴会前、容卿小学校の講堂で「懇親大会」が開かれる。大会で三房出身の村長、「柯蔡宗親總會」（蔡と柯姓の宗親組織）の理事長、「台胞」（台湾の同族）と「僑胞」（華僑の同族）代表はそれぞれ血縁関係を結ぶ宗族的感情が溢れる発言をしてから、海外の「族親」（同房族の人々）に「獻旗」（旗を贈る）儀式をおこなう。発言の内容は「今後さらに互いに協力しあい、子孫の幸福のため、力を合わせて頑張ろう」という趣旨である。その旗には、いずれも祖先や同族をうやまう言葉が書かれている。例えば、「克繩祖德、矢播宗風」「邇源思本、尊祖敬宗」「海峡遠航謁祖願、重洋難阻還鄉情」などである。最後に、大がかりな宴会が容卿小学校で開かれる。終了後、代表は一人ずつお土産をもらって、数組の西洋楽団の演奏の中を三房の人々に見送られ

る。招宴は晋主を利用して、多くの村落と友好関係を作る
と同時に、多くの村落に自分の宗族の再統合を宣告する役
割が非常に大きいと思われる。

容卿宗族では、小宗が晋主をおこなった後、大宗の家廟
は約二年間の準備をへて、より盛大な晋主もおこなった。
その内容は、小宗と基本的に一致している。家廟での晋主
は全容卿宗族の再統合の達成を象徴している。

四 晋主後の宗族

現代社会への復帰

晋主をおこなった各小宗の祠堂では、容卿宗族の始祖お
よび各房小宗の始祖の位牌は「主王」として、祭壇の一番
高い段の中央におかれている。「主王」とは「神主の王様」
であり、他のものより大きくて、飾りも豪華である。三房
小宗の祠堂内の祭壇には、枋を除くと、約六五〇の位牌が
一七段並んでいる。そのうち、神主が約三分の二を占める。
三房小宗の祠堂では、このような位牌の大きさと配置の
仕方の違いは、始祖を中心として、小宗が統合されている
ことを表している。そのほか、大庁の中央には祭壇の左側
に土地公龕が設けられ、「福德正神神位」という大きな位
牌も供養されている。祭壇の右側には名前も知られていな
い小宗の「祖先」たちを奉る大きな位牌が安置されている。

これらの「祖先」は変死や若死のため、正式な祖先とされ
なかったと考えられる。その位牌は「容卿三房列位祖伯叔
考泪祖伯叔妣諸神位」と書かれており、これらの無縁仏を
安じ供養する目的をもつとされる。祠堂での祖先祭祀は年
一回、小宗の長老のみが参加する祭冬がおこなわれる。

大宗の大祠堂は、再び家廟として立派に建てられた。現
在、家廟では、閩南地方の蔡姓の始祖とよばれ、宋代の有
名な大臣であった蔡襄、容卿始祖の父と容卿始祖の念五公、
各小宗始祖の父の念八公など四人の位牌を供養する。家廟
での祖先祭祀は年二回で、「春冬二祭」とよばれる。祭祀
儀礼には三つの小宗の長老たちのみが参加する。

晋主後、祖先祭祀などの宗族活動は、長老会の規定によ
っておこなわれる。宗族組織は再び村落社会に機能してい
るように見える。例えば、古宅村の「蔡氏宗祠晋主慶典委
員会」は、晋主の前にすでに晋主後の宗族の活動を決め、
次のように「古宅蔡氏宗祠晋主後各種規定及注意事項」
（晋主後の諸規定および注意事項について）を制定してい
た。

- ① 各祖庁の修主忌は毎年三月二十四日に挙行するよう
統一する。祖庁は冬季に修主忌をおこなうという慣習
がある場合、それを継続しておこなってもよい。三月
二十五日に各世帯は五味碗を用意して、祠堂で祖公(祖

先)の祭祀をする(春祭をおこなわない)。

② 冬祭は毎年十月十二日とし、祠堂および各祖庁の「開竈門」(祖竈の開門式)は八月十五日とする。

③ 祠堂大門は三月二十八日辰刻に閉じて、八月十五日に開く予定である。もし、「添新丁」(男児の出産)があれば、早めに吉日を選んで開門できる。

④ 各祖庁は四力月以内に祭祀する場合、「金」(冥銭の一種類、神の祭祀用)を燃やさなければならぬ。「銀」(冥銭の一種類、鬼の祭祀用)の使用は禁じる。

⑤ 死亡三年以内は、祭祀前に「哀声告霊」(亡霊に呼びかける儀礼)をしてはいけない。

⑥ 四力月以内に死者が出れば、祖庁で「守霊」(死体を祭祀する儀礼)と「引魂入祖庁」(亡霊を祖庁に引き込む儀礼)をしてはいけない。

⑦ 宗族は四力月以内に、嫁をもらうことができるが、娘を嫁に出すことは禁止される。

⑧ 祠堂内のゆりかごと乳母車は添新丁の世帯に贈られる。「公家」(宗族)は人民幣一〇〇〇〇元を奨励金として給付する。本祠堂に所属する各世帯(他村の在住者を含む)に「糖豆」(飴類)を配る。

⑨ 本年三月二十五日から、五年ごとに一回緑皮をとる。緑皮を脱ぐ世帯は公家に二〇〇元を払う(以後、貨幣価値の変動により相場は変わる)。そのほかの事項は

すべて公家に任せる。

⑩ 「修主」した神主は、毎年の做忌(命日の祭祀)をしなくてよいが、各世帯はそれぞれの状況によって決められる。

註 以上の期日はすべて旧暦である。

古宅村蔡氏宗祠晋主慶典委員会

一九九五年四月三十日

この規定と注意事項は祖先崇拜のやり方、葬式の場合や結婚の可否、贈り物の贈呈範囲、ないしは祭祀用の冥銭の種類など微細なものにまで及んでいる。つまり、宗族再興のために、関係する儀礼や風俗さえも、宗族の長老によって詳細に規定されたのである。これは晋主後に再統合した宗族に対して、宗族長老会が権力を行使するあらわれと見られ、一つの統合的な集団としての宗族のあり方を示している。

容卿三房小宗でも同じように、祠堂落成、晋主儀礼をおこなった後、「容卿三房宗祠重建委員会」と「容卿三房宗祠落成慶典委員会」は「容卿三房宗祠管理委員会」に変わった。三房の宗祠管理委員会は小宗レベルの祖先祭祀を明確に規定し、祖先崇拜を復活させようとした。例えば、三房小宗の祠堂落成後二カ月余りしか経っていないうちに、委員会は三房小宗の始祖の墓参り、祭冬、村民の礼金納入、

ないしは各房族の祭冬の参加者数を事細かに規定する通達を公表し、小宗レベルの宗族指導部の役割をはたしていた。この通達の内容は次のようである。

祖徳を継承し、祖先を祭祀し、清明に墓参りの儀礼をおこなうために討議した結果、管理委員会は以下のよう
に通知する。

① 三房宗祠管委会の委員全員は毎年四月七日に三房宗祠に集合し、隱齋公（三房小宗の始祖）などの墓地に行つて、墓参りの儀礼をおこなう。

② 各房族の管理委員は各房族の新婚喜慶礼（一件五〇元）を登記・領収して、冬祭日にまとめて管理委員会に納付する。

③ 各房族の管理委員は、毎年の冬祭日に各房族に比例した人数を召集し、宗祠での冬祭の儀礼に参加させる（管理委員のメンバーはこの比例数に含まれない）。

④ 各房族の冬祭参加者比例数を付記。（ここでは省略する）

上述したように、毎年の祭冬の際に、新婚または男児を出産した世帯が一件あたり五〇元の「新婚喜慶礼」を小宗に納付しなければならぬと、容卿三房小宗は規定していた。一九九四年二月三十一日（旧曆十一月二十九日）、一世

紀以上も途絶えてきた三房小宗の集団的な祖先祭祀は、計画通り「容卿三房小宗祠堂管理委員会」の指導下で盛大に執りおこなわれた。この日まで、「新婚喜慶礼」の徴収もほぼ計画通り完了した。

祭冬の前に、小宗の各房族の長老は各房の新婚、男児出産の情報を詳細に小宗に報告する。小宗は正確な情報を得た上で、各村落に散在しているこうした世帯に、祭冬の宗族晩餐会の招待状と「新婚喜慶礼」の納入通知を送付した。対象となる七一世帯に通知したうち、六九世帯は祭冬日までに納付していた。納入者に関しては、貧しくて一〇元しか納付しなかった一例を除いて、すべて規定金額の通知か、それを上回った額を納入した（六九世帯中の二一世帯が上回った額を納入している）。小宗のまとめた『一九九四年度容卿三房新婚喜慶捐款登記表』によると、六九世帯全体で五〇八〇元を納入した。それと同時に、対象外の二人は一五〇〇元を寄付したため、祭冬で合計六五八〇元を収めた。この事例からは、小宗の宗族的組織性と動員力、および村民の宗族の権利と義務の履行に対する積極性と意欲がみられる。

一九九五年四月七日の墓参りも再びおこなわれ、三房小宗の祖墓の修築も始まっていた。その後、こうした小宗の祖先祭祀は毎年おこなわれ、固定化されるようになった。また、家廟晋主後も、容卿大宗族の祖先祭祀などの活動は

年々おこなわれるようになった。

晋最後の族産は、祠堂や家廟管理委員会のような宗族長老会により管理および運営されており、その機能は正常に發揮されている。族産の管理と運営の責任者は祠堂や家廟の管理委員会の主任、副主任といった族長などの宗族長老である。しかし、具体的な管理と運営の実務は管理委員会の財務組により担当される。主要な族産の管理と運営は、動産のうちの資金（現金）でまかなわれることが多い。資金の収支を分けて考えると、収入では、現在所有している資金を増やすことと、新たに徴収（または募金）をおこなうことの二つの面で展開する傾向が見られる。支出では、宗族組織の結束と発展にかかわることに限られる。そのなかでも、すでに述べたように宗族の祖先祭祀にかかわる支出が多いようである。

容卿三房小宗では、その祠堂落成からまる一年後の一九四四年一月に、その一年間の収支状況をまとめる『容卿三房宗祠收支公布表』を公表した。これを見ると、三房小宗の族産は再形成された時点で、一四万余りの資金を持っていた。一年後には、三万余りが増えて、一七万五〇〇〇元ほどになる。収入源は貯金利息と村民の寄付金（例えば、祭冬の際に新婚夫婦および男児を出産した夫婦が払うべき「新婚喜慶礼」など、宗族規定の納入金を含む）が中心である。支出項では、祖先祭祀にかかわる宴席や演劇

や供え物などが一二六七・九元となり、最大の支出であることがわかった。一年間の収支状況から見ると、資金の管理と運営はバランスを保っており、族産は良い方向に發展していると考えられる。

二房の収支管理と運営も三房と相似しているが、小宗の収入が貯金利息に偏っているように見える。二房小宗は、一九四五年一月から五月までに詳細な収支統計表が三回も公表された。それを見ると、宗族の長老は意識的に貯金利息によって宗族の活動資金をまかなおうとしたことがわかる。また、小宗の日常運営費以外、最大の支出は祖先祭祀である。例えば、祠堂落成後、初めての祖先祭祀儀礼である「開龕門」では、儀礼とかかわる演劇、傀儡劇、宴会、冥錢などの支出が一九〇七四・五〇元にも達していた。

宗族に対する村民がおこなう現金の納付と寄付は、宗族成員としての義務である。そして、それによって族産が貯えられていくのである。再統合された宗族においては、村民が経済面で宗族集団を支えることが普通になった。また、宗族が所有する資金を貯蓄することで、利息で宗族の祖先祭祀などの宗族活動をまかなう傾向が見られる。もちろん、場合によっては、宗族成員から族産に「入金」（寄付と徴収）させることもある。このようにして、宗族の財産を維持、補充、増額するようになる。それと同時に、宗族の長老会には族産の管理と運営によって、宗族統合の維持を図る役

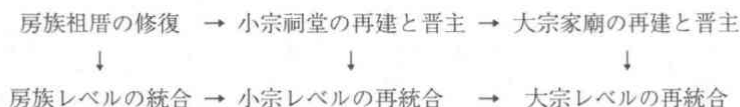


図3 容卿宗族再統合のプロセス図

割もある。晋主後の族産の管理と運営からは、現代における宗族の存続と発展のあり方がうかがわれる。

また、晋主後、宗族は村落社会の安定や経済・文化の発展にもより大きな役割をはたすようになった。晋主後の宗族活動の固定化や宗族組織の平穩な運営、および社会的機能の発揮をみて、晋主は宗族の再興を象徴するものであるといえるだろう。

おわりに

容卿宗族の事例では、宗族の基層分節である房族の祖厝の再建と祖先祭祀の復活、および小宗祠堂の再建と晋主を通じて、小宗の宗族的な再統合が達成された。その後、これに基づいて、ついに大宗の大祠堂を家廟として再建、さらに晋主を通じて、最終的に全容卿

宗族の再統合が達成された。容卿宗族の再統合のプロセスは次の図式で表現できるだろう(図3)。

また、晋江・石獅におけるほかの宗族においても、こうした房族から宗族までに至る再興のプロセスが普遍的に見られる。

晋主が宗族の再興を象徴する理由は、祠堂の再建と晋主の実施を準備する段階において、宗族組織の再統合にとつて必須の条件である祖先祭祀の再開、族譜の再編、族産の再蓄積、またはこれに基づいた血縁関係の再重視と系譜関係の再強化、宗族組織の再確立、さらに村落社会における宗族的機能の再発揮などが揃っているからである。また、晋主後、宗族活動の固定化や宗族の現代社会への復帰からも、それを説明することができるといえるだろう。

註

① 本稿では、閩南人は閩南の漢民族に限定する。今日、閩南人とはばれる人々は、晋代(紀元三世紀)以後、中原より現在の閩南地方に移住してきたとされる(林再復『閩南人』台北・三民書局、一九九一年、七一―一頁)。また、歴史上、閩南人が海路によって別の地域に集団的に移住することも多かった。そのため、閩南以外のいくつかの地域に閩南文化の要素をもつ社会が存在している。そのうち、広東省の潮汕人社会、とくに台湾の閩南人社

会がよく知られる。

〈2〉 歴史上、晋江県の中で石獅は商業で有名な鎮（町）の一つであった。一九八〇年代から急激な経済成長を遂げ、一九八八年一〇月に晋江県から「県級市」（行政上の県と同格）として分離され、泉州市の直轄におかれることになった。また、一九九二年三月、晋江県も同様な経済急成長により、行政上の県から市に昇格した。

〈3〉 蔡は晋江県（一九九二年以前の行政区）最大の大姓で、県内全人口の三分の一を超える四〇万人が一八二の村落に分布する。その中では、単姓村が圧倒的な多数を占める。容卿村の周辺には数多くの蔡姓村が分布している。しかし、その中には、同じ蔡姓であっても祖先が違ふ大甯村、彭田村が含まれる。また、容卿村の周辺には黄、許、呉、林などの単姓村や雑姓村も散在する。

〈4〉 これ以外に、台湾、フィリピンをはじめ東南アジアや中国本土の各所に移住した人は一万人を超えといわれている。

〈5〉 このような容卿の八つの自然村は、それぞれ強房、二房、西坑、赤坑、水坑、山下、仕林、玉楼である。

〈6〉 しかし、この血縁的容卿八郷の範囲は、解放後に設定された行政村である容卿村の領域と一致しない。行政上の「容卿村」は六つの自然村、強房村、二房村、西坑村、赤坑村、水坑村、山下村から構成される。これに含まれない仕林村はそれ自体で一つの独立した行政村をなし、玉楼村は別の行政村、塘園村に属する。こうして容卿八郷は、行

政上では容卿村、仕林村、塘園村に分割されることになった。一九九四年一〇月、行政村容卿はさらに三つの行政村に分離された。すなわち、強房村と西坑村の二つの自然村は行政村の靈獅村に、二房村と山下村は行政村の靈峰村に、赤坑村と水坑村は行政村の靈山村をそれぞれ構成することとなった。つまり、容卿宗族が居住する村落群の容卿八郷は、五つの行政村に分割されることになったのである。

〈7〉 その時期は民間の「八大節」、つまり正月初二（新年）、正月十五の元宵（上元）、清明、端午、七月十五の中元、中秋、冬至、「年兜」（大晦日）に対応する。

〈8〉 閩南における宗族再興の社会的な要因には、主に以下のような点があると考えられる。第一は、国家政策の変更。第二は、閩南において、海外華人社会との交流が盛んになり、海外華人からの多額の経済支援と、華人社会に保持されてきた伝統文化の「逆輸入」があった。第三に、政治・経済体制の転換期にある現在、宗族組織の再興は社会的にも必要になっている点を指摘できる。例えば、村落の行政組織が村落社会を統制するには、伝統的宗族組織の協力が必要である。第四は、閩南農村社会において、民間信仰の復活や伝統的風習の復興など、伝統文化への「回帰」という文化的雰囲気が生まれた。第五は、閩南農村での宗族のいち早い再興は、閩南における宗族の発達の歴史と深くかわっていること、などがあげられる。

〈9〉 ただし、年齢、子孫の有無などに条件がある。一般的には、孫をもつ五〇歳以上の人に限定される。

⑩ 容卿宗族の祖厝は、全部で五〇棟ほどある。祖厝は土と木でつくられたものが多い。一般には、「頂下落」とよばれる前後に並んだ二棟の建築からなっており、両棟の間には「天井」とよばれる庭があり、両側に固定名称をもつ「厝房」とよばれる離れが設けられている。大きな祖厝の場合、前後の両棟にそれぞれホールが設けてある。入口と接するホールは「下庁」、「上庁」（大庁、正庁、庁堂）とよばれる奥のホールは、祖先祭祀をおこなう場所である。上庁の真正面には、祖先の位牌を安置する「公媽龕」（祖龕）とよばれる祭壇が設けられている。これらの建築は閩南文化が分布する福建南部、台湾、広東東部に集中している。また、家廟、祠堂、祖厝は建築様式においては大差がない。

⑪ 「公媽」とは祖父母の意味で、位牌のことを「公媽牌」ともいう。「孝公媽」とは関係が近い祖先への祭祀を意味する。

⑫ 台湾の漢族社会を研究した末成氏によると、台湾の閩南人村落では「正庁」で做忌儀礼がおこなわれる（末成道男「宗祠」と「家祠」——二つのレベルの祖先祭祀空間——『文化人類学』五、アカデミア出版会、一九八八年、三六—三八頁）。これは家屋の大庁で供養することが前提となる。さらに、Wolf は、こうした祭祀儀礼を「家庭的祭祀儀礼」(domestic rites) とよんでくる (Wolf, A. Aspects of Ancestor Worship in Northern Taiwan. In William Newell, ed., *Ancestors*, pp. 341. The Hague: Mouton Publishers, 1976)。閩南におこつて、神主を家屋の大庁

に置いて供養することがある。しかし、こうした現象はあくまでも宗族組織が弱い村落にみられるものである。ただし、変死した「先祖」の位牌や遺影は祖厝に入る資格がないため、家屋の大庁の横に供養するケースがある。もちろん、こうした変死者が「祖先」になれるかどうかについては定論がない。古来の風俗によると、こうした者の位牌は祖厝に入る資格がなく、それらの魂は「祖霊」にならないため、「孤魂野鬼」（無縁仏）になる恐れがあった。しかし、最近、変死者の遺影がひそかに祖庁に入れられるのにもみられるようになった。

⑬ 「清通礼」卷十七、「吉礼」。

⑭ 一説では、明の中期頃には、庶民の家廟建設に関する制限が事実上消滅した（左雲鵬「祠堂族長族権の形成及其作用試説」『歴史研究』第五—六期、中国社会科学雑誌社、一九六四年）。

⑮ 泉州市では、一九八〇年代から老人が自発的に「老年協会」（老人会と略されることが多い）を組織してきた。それは政府の奨励のもとで、急速に発展した。今では、九〇％の行政村と町に老人会が設立されている。

⑯ 「容卿蔡氏家廟重建董事会名簿」によると、名誉董事長一名、名誉副董事長四名は全員フィリピンにある菲華容卿同郷会の理事であり、名誉顧問二二名中の二名は台湾に居住する容卿出身者である。また理事二〇〇名中には、香港とマカオから七名、台湾から七名の容卿人が選出されていた。これらを除く董事会の成員はほとんどが老人会の

が異なる。

※文中の写真はすべて、筆者が撮影したものである。

実力者であり、特に責任をもつ正、副董事長と各組のメンバーは容卿老人会の責任者たちを中心に構成された。一方、「容卿蔡氏家廟重建監事会名簿」によると、名誉監事長三名は全員フィリピン菲華容卿同郷会の監事であり、名誉副監事長三名を含めたメンバーは二七名で構成され、これは、「董事会」が再建の指導を担当するのに対して、再建にかかわる仕事の監察を分担していた。

〈17〉 房の下位分節。

〈18〉 「字輩」は世代である。宗族の系譜から見ると、同じ世代を「同輩份」とよぶ。同世代の人どうしが名前のなかで共有する漢字一字を「輩字」という。現在、すべての村民は輩字を取り込んで名付けることはないにもかかわらず、各目の輩字を知っている。また、族譜にはかならず輩字を使う。宗族の人々は輩字から字輩（世代）を判明することが普通である。

〈19〉 容卿宗族の家廟の再建にともない、大宗の族産も再び形成されていったため、大宗と小宗がそれぞれの族産をもつという状態になった。

〈20〉 禄位を持ちながら行進する宗族のパレード。

〈21〉 子孫の多少、家運、干支、人望の有無などから評価する。

〈22〉 閩南地方では、晋主儀礼の一部として、和尚による「超度」か、あるいは「師公」とよばれる道士による「做功德」かのどちらかがおこなわれる。その祭壇の設置もほとんど同じである。ただし、お経と「呼請」（依頼）される「神祇」